

◇ 国 語

国 3-1～国 3-19 まで 19 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「イギリス人は歩きながら考える。フランス人は考えた後で走りだす。そしてスペイン人は、走ってしまった後で考える」——こんなフレーズをどこかで耳にした覚えはないだろうか。これは朝日新聞ヨーロッパ特派員であった笠信太郎（二九〇〇—六七）の著書、『もの見方について』（一九五〇）の冒頭に引かれている文章で、著者によれば、誰が最初にいだしたのかはわからないが、国際連盟事務局長も務めたスペインの外交官、マドリヤーガが書いた言葉として紹介されている。

一時期、人口に膾炙したこのケイクは、ほとんど流行語にもなったせいも、いつのまにかひとり歩きして、さまざまヴァリエーションを生み出してきた。笠信太郎自身も先の言葉に続けて、「ドイツ人もどこかフランス人に似ていて、考えた後で歩きだす」という一文を付け加えているし、このほかにも引用のヴァージョンによっては「イタリア人は走りながら考える」という一句が加わっていたり、「日本人は誰かが走っていると、その後について走る」というおまげがついていたりすることもある。

最後の例についていえば、確かに「日本人には付和雷同型の人間が多い」という通念はかなり定着しているようで、火災に見舞われた豪華客船の乗客を海に飛び込ませるには「皆さん飛び込んでいますよ」といえばいいという有名なジョークがあることは、知っている人も多かるう。これを聞くと、同じ状況に置かれたら自分もそうするかもしれないとつい納得させられ、思わず苦笑を誘われたりするものだから、なるほど

甲

というべきか。

しかし考えてみるまでもなく、この種の類型化にはべつに統計的な裏付けや学問的な根拠があるわけではないし、当然ながらみずから進んで海に飛び込む日本人だっているだろうから、とりあえずは少しばかり誇張しておもしろおかしく味付けをした諷刺程度に受けとめておくのがブナンというものだろう。

ちなみにイギリス人には「紳士は飛び込むものです」、フランス人には「飛び込むではいけません」、ドイツ人には「命令だから飛び込みなさい」、イタリア人には「さつき美女が飛び込んだぞ」といえばいいとされていて、じつによくできたジョークだと感心させられるが、実際にどの言葉に反応して飛び込むか（あるいは飛び込まないか）は、国籍を問わず

乙

にちがいない。

そもそも「イギリス人は……」「フランス人は……」のように総称名詞を主語にたてて語られる国民性論議は、バクゼンとした実感や推測から作られた印象主義的一般論にすぎない場合が大半であり、これを口にする当人たちもそのことを知らないはずはないのだが、にもかかわらずなんとなく事の本質がわかったような気にさせる効果をもつという意味で、くれぐれも注意を要する物言いである。

そうした危険を承知のうえで、本書ではあえて「フランス的思考」という一般的な表現をタイトルに掲げている。しかしいま述べたことからおわかりのように、私はこのように呼べるものが確固たる実体としてどこかに存在するなどと考えているわけではない。それは「イギリス的思考」や「ドイツ的思考」、あるいは「日本の思考」などがどこかに存在するわけではないのと同じことだ。これらはあくまでも、解釈する側が意識的に構築することではじめて概念として立ちあがってくるものである。そうした自覚なしに「フランス的なものの考え方はどのようなものか」と大上段に問うてみたところで、納得のいく回答など得られるはずもない。

だから私としては、世にルフしている「国民性」幻想にもたれかかったままで、既成概念としての「フランス的思考」を探求したり定義したりするつもりはない。それよりも、本書では何人かの思考者たちを手がかりとして、この問いをめぐって思考する過程そのものを、ただありのままに記述してみたいと考えている。つまりいっさいの前提ぬきで「フランス的思考について思考する」こと、それが本書のめざすところである。

なぜイギリスでもドイツでもなくフランスなのか、という疑問にたいしては、ごく単純に、私自身の読書経験や実体験がもつばらフランスにかたよっているからと答えておくしかないのだが、それでも日本人にとって重要なのはやはり「日本の思考」について問うことであって、他国のことなど二の次ではないか、という主張は当然ありうるだろう。まことにもつともな指摘である。だいいち、誰の目にも明らかかなグローバル化の急速な進展に直面している現代世界において、いまさらフランスからなにか学ぶべきことなどあるのだろうか？

この第二の疑問にたいしては、確かにフランスから学ぶべきことはまだ数多くあるにちがいないが、少なくともそれを採し当てるのが本書の主眼というわけではない、と答えておこう。笠信太郎の著書には「西欧になにを学ぶか」というサブタイトル

がつけられていたが、それから半世紀以上の歳月を経たいま、私はべつにヨーロッパの著述家たちの言葉からもっともらしい教訓や有益な指針を引き出したいとは思っていない。それよりも、フランスをきっかけとして「思考する」ことの愉しみを心ゆくまで味わうことができさえすればじゅうぶんだし、それがけつきよくは日本の思考について問い直すことにもつながるのだと考えている。

じっさい、思考することはなによりもまず、純粹な快樂なわけにはあるまいか。そうでなければ、人々はどうしてあれほどの情熱を傾注して困難な課題に立ち向かったりするだろう？ 時には行き詰まったり途方に暮れてしまったりすることがあったとしても、私たちがこんにちにいたるまで思考という営みをけつして放棄してしまうことがなかったのは、たぶん最終的にはそれが、なにもものにも代えがたい至上の愉しみをもたらしてくれるからである。そしてその快樂はおそらく、対象が「フランス的思考」であれ「日本の思考」であれ、まったく変わらぬものであるはずだ。

ところで「フランス的思考」という日本語は、フランス語にすれば、《*pensee française*》(panse・フランセーズ)となるが、これをもう一度日本語に戻せば「フランス思想」と訳するのが一般的である。この場合は「フランス」という国家の存在を、アイデンティティそのものの不確かさについてはさしあたり問わぬままに前提したうえで、その内部で形成されてきたさまざまな
ア 営みの総体を表すことになる。

いっぽう、《*pensee française*》という語句をあえて「フランス的思考」と訳してみると、事情はずいぶん異なってくる。まず、「フランス的」という言葉について。

「的」という一語を入れることで、この形容詞は実体的な国家としての「フランス」からはひとまず切り離されて、どちらかといえばバクゼンとした本質のようなもの、目には見えない精髓のようなものを浮かびあがらせる。たとえば「フランス文学」というと、基本的にフランス人によってフランス語で書かれた文学を指すのがふつうだが(もともと近年は亡命文学やクレオール文学などの登場によって、そうした対応関係はかならずしも自明のことではなくなっているが)、「フランス的文学」といえば、いかにもフランスの文化的伝統や
イ 心性を反映した文学といったニュアンスになる。

もちろん、そうした「伝統」だの「心性」だのといった概念自体が多かれ少なかれ幻想にすぎないともいえるわけだが、それでも私たちはこのとき、**ウ**な枠組みとしてのフランスとは別のレベルで、「フランス的」なものを特徴づけている属性とはいったいなんなのか、という**エ**な問いに直面せざるをえない。

では、「思考」のほうはどうか。

この言葉は、フランス語にしまえば「思想」と同じになるが、両者のニュアンスは明らかに異なっている。《pensee》という名詞は「考える」(penser)という動詞の過去分詞に由来するので、本来は**オ**な意味、すなわち「考えられたこと」の意であり、そのかぎりにおいて「思想」という日本語に近い。英語の《thought》が、《think》の過去分詞であるのと同様である。パスカルの『パンセ』(Pensees)が、『瞑想録』と訳されたりすることをここで思い出してもいいだろう。

しかし「思考」という日本語は、明らかに動詞的な概念を色濃く宿している。つまり「思想」は「すでに考えられたこと」であるのに対し、「思考」は「現に考えること」であり、そのニュアンスは過去分詞的というよりも、むしろ現在分詞的である。じつさい英語では、《thinking》がそうした意味の名詞として用いられるが、フランス語の現在分詞である《pensant》には原則として名詞用法はなく、その代わり、《pensee》という単語に両者の意味が兼ねられているために、二種類の訳し方が可能になるわけだ。

このことを押さえたうえであらためて確認しておく、ここでとりあげようとしている《pensee française》は「フランス思想」ではなく、「フランス的思考」のほうである。つまり本書は、さまざまなりゅう^Uホ^Uつき^Uき^Uではあれ「フランス的」という形容詞を冠することができるかもしれない「思考」のありようをめぐる問いかけの書物であって、すでに確立された「フランス」の「思想」に関するなんらかの見取り図のようなものを答えとして提示する書物ではない。

(石井洋二郎『フランス的思考』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ケイク

- ①先輩にケイジする
- ③危険をケイコクする
- ⑤ケイトウ的な学習

- ②直情ケイコウな性格
- ④ケイガの至り

1

B ブナン

- ①ブリョクを行使する
- ③損傷のブイ
- ⑤ブベツ的な発言

- ②プトウ会を開く
- ④ブジに帰宅する

2

C バクゼン

- ①ユウゼンと構える
- ③地位をゼンジョウする
- ⑤ゼンエイ的な芸術

- ②問題にゼンシヨする
- ④人口がゼンゲンする

3

D ルフ

- ①フオンな空気
- ③フサイを抱える
- ⑤海外へフニンする

- ②宣戦をフコクする
- ④フハイした政治

4

E リユウホ

- ①自己ホシンを図る
- ③ホチョウを合わせる
- ⑤道路をホソウする

- ②燃料をホキユウする
- ④犯人をタイホする

5

問二 空欄「ア」・「イ」・「ウ」・「エ」・「オ」に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア	①模範的 ④妥協的	②思想的 ⑤短絡的	③営利的	6
イ	①一時的 ④集合的	②飛躍的 ⑤連動的	③世界的	7
ウ	①包括的 ④慢性的	②制度的 ⑤悲観的	③楽観的	8
エ	①發展的 ④内面的	②典型的 ⑤実践的	③根本的	9
オ	①集約的 ④合理的	②受動的 ⑤宿命的	③生産的	10

問三 傍線部 (a)・(b)・(c) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 人口に膾炙した

- ① 人びとが口にするのをはばかり
- ② 人びとの話題になって知れ渡ること
- ③ 人びとが自由に発言すること
- ④ 人びとの意見がまとまらないこと

11

(b) 付和雷同

- ① 種類の異なるものをくつつけること
- ② 惑うことなく同意すること
- ③ 仲が悪く意見に反対すること
- ④ 自分の見識ではなく他に合わせること

12

(c) 大上段に問う

- ① 身分の高い人が下問すること
- ② 大きさに問うこと
- ③ 上司に質問すること
- ④ 有識者に意見を求めること

13

問四 空欄 甲・乙 に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

甲

- ①言行一致
- ②言い得て妙
- ③言い知れない
- ④言語道断

14

乙

- ①一朝一夕
- ②二律背反
- ③一期一会
- ④十人十色

15

問五 傍線部(二)「私はこのように呼べるものが確固たる実体としてどこかに存在するなどと考えているわけではない」とあるが、筆者がそう述べる理由は何か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

16

- ①火災に見舞われた豪華客船に乗り合わせて、さまざまな国の人に海へ飛び込ませる実験をしたことがないから。
- ②フランス人の性格は多種多様で、類型化したり、一般論として国民性を語るができないから。
- ③国民性論議には統計的な裏付けや学問的な根拠があり、印象主義的一般論だから。
- ④既成概念としての国民性を大切にしなければ、「フランス的思考」を探求したり定義づけたりできないから。
- ⑤フランスで実際に暮らしたことがなく、読書の経験からしかフランス人の性格を想像できないから。

問六 傍線部(二)「確かにフランスから学ぶべきことはまだ数多くあるにちがいないが、少なくともそれを探し当てることが本書の主眼というわけではない」とあるが、それでは『本書の主眼』とは何か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

17

- ①日本人にとって重要な「日本的思考」について問うこと
- ②フランスをきっかけとして「思考することの愉しみを心ゆくまで味わうこと
- ③ヨーロッパの著述家たちの言葉から教訓や有益な指針を引き出すこと
- ④グローバル化の急速な進展に直面している現代社会の課題を追求すること
- ⑤フランス人の文化的伝統をフランス文学の中から探し出すこと

問七 本文の論旨と一致するものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。

18

19

- ①思考するということは純粋な娯楽であり、至上の愉しみをもたらしてくれるものである。
- ②フランスから学ぶべきことは数多くあり、そこから最ももらしい教訓や有益な指針を引き出したい。
- ③総称名詞を冠して語られる国民性論議は印象主義的一般論である。
- ④「フランス的思考」と呼べるものは確固たる実体として存在しているのである。
- ⑤日本人にとって重要なのは「日本的思考」について問うことである。
- ⑥火災に見舞われた豪華客船の乗客を海に飛び込ませるには国民性によって違う言葉をかけるとよい。

問八 この文章に付ける題名として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 西洋人と日本人
- ② イギリスとフランスの違い
- ③ 国民性という幻想
- ④ 流行語の嘘とまこと
- ⑤ 日本的思考とは何か

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

かつてはレストランに予約を入れるということは、いまほど一般的ではなかった。三〇年前くらいまでだろうか。店先で順番を待つということにも人々は「ア」だった。そもそも、物事は計画を立て時間通りに進行させられるものだという意識がいまより希薄だったのではないだろうか。

アポなし訪問もあたりまえだった。学生時代、アパートには電話も引いていなかったので、人が訪ねてくるのはいつも突然だった。帰宅するとドアにメモなどがはさんであり、それで来訪者があつたことを知ることもしなくなかった。そんな時代は、友人をたまたま訪ね留守で待たされたとしても、怒りようもなかった。

他者と自分との時間をすりあわせることより、両者の時間が重なる地点を、ゆるやかな態度で探すということが日常的に行われていたのだ。

それが今日では、レストラン、病院はもとより、日常のあらゆる場面で予約が求められるようになった。私たちはさまざまな場所に予約を入れる。時間割を構築して、なるべく不確定な時間を入れないようにしようという意識は、ことのほか強くなっている。ところがそれがなかなかうまくいかない。だから現代人は、いつも時間と格闘することになる。

時間をめぐるさまざま葛藤を考えると、私は川の流れを連想する。川はさまざまな水流が複雑に絡み合い、互いに影響し合いながら流れている。けっして「イ」ではない。川底の地形や水量によって場所ごとに変化を繰り返している。誰かが投げこんだ石ころひとつによつても、水流は乱され変化する。私たち一人ひとりが抱えている時間も、この川の流れに似ている。

さらに「時間」について思いをめぐらすとき、ポリフォニーという言葉を感じ起す。ギリシャ語で「多くの声」を意味する音楽用語である。それぞれの声部が独立し絡み合つて流れていく音楽で、その反対にホモフォニーとは「ひとつの声」のことをいう。

社会は、それぞれの個人がかかえる時間の集合体ともいえる。多くの声＝時間がポリフォニーに進行する世界として成りたつ

ている。ところが現代の私たちは、それぞれが独自のホモフォニーな時間を確立しようとして奮闘している。ホモフォニーな時間とは、他者の時間を考慮しない、いわば独立した帯グラフ的な時間のことだ。

世の中全体に流れる時間はポリフォニーである。しかしそれは、個々人の時間が並列的に流れているだけではない。一見すると、私の時間と他の誰かの時間とは別々に存在しているように感じるが、実はそれらは私たちが知らないところで絡み合い、関係し合っている。川の水流と同じである。

たとえば朝の通勤電車に乗る。ところが電車はトウトツに線路上で臨時停車した。「〇〇駅での人身事故のため、ただいま停車しております」というアナウンスが流れる。こうした場合、そのほとんどはホームからキドウ内への飛び込み自殺だ。車内には重い空気が流れる。死者への同情もあるかもしれないが、大半は出社時間の遅れにたいする心配だ。乗客たちは五分もすると、たまらずケータイを取りだしメールを始める。そのうち通話を始める人も出てくる。

予期せぬ「待たされる」時間の割り込みで、車内に閉じこめられていた数多くの帯グラフ的時間は一律に「停滞」する。ひとりの人物の時間は永久に消滅し、そのことが数千人、あるいは数万人の時間を変更させる。これは極端な悲劇的な例だが、ひとりの時間が見知らぬ誰かを巻きこみ、別のひとりの時間割を変えてしまうことは少なくない。これが社会というものだ。

人が生きていくということは、多元的でポリフォニーな時間を受け入れることだ。が同時に、一元的でホモフォニーな帯グラフ的生活という矛盾した理想を抱えこむことで、ストレスや混乱が生まれている。「待つこと」が「待たされること」として否定され、帯グラフの失敗として記録される。

もし帯グラフが完璧に達成されるとすれば、他者が自分の帯グラフを ウ することなく、それに従ってくれるときだ。あるいは、まったく孤立した存在として生きる場合。しかし、そんなことはありえない。

私たちは暴君ネロでも、ロビンソン・クルーソーでもないからだ。にもかかわらず帯グラフ主義を理想とすることは、すなわち非社会的な幻想を抱きながら、この社会で生きていこうとする、とても矛盾に満ちた行為だといわなければならない。

私たち人間は往々にして、その矛盾を抱えこんだまま日常を過ごしているのである。

ある日のことだが、電車のなかでひどくやるせない光景に出くわした。私の隣りの席には制服姿の小学生が腰をおろしていた。正確にいうと、座席の前の床にひざまず跪くような格好で、勉強していた。座席にランドセルをのせ、その上に置いたプリントと懸命に取りくんでいる。

まだ二年生くらいの男の子で、格闘相手は算数のわり算とかけ算だ。五分ほどして男の子がプリントをしまい、ノートに漢字の書取りを始めたとき、私は自分の読書にもどった。しばらくして、ドサツという物音がした。目をあげると、ランドセルが床にころがっていた。男の子はきよんとしてあたりを見まわすと、あわてて拾い始めた。ノートや鉛筆も散乱している。彼は居眠りをしてしまったのだ。横浜駅で飛ぶように電車を降りていった。

あの八歳か九歳の子は、すでに帯グラフ的生活感覚に身をゆだねている。将来どんな大人になるのだろうか——。私の感傷などどこ吹く風で、このような帯グラフ的な時間コントロールへの欲望は、ますます強くなっているように見える。ことに若い世代になるほど帯グラフに依存しているようにも感じられる。

(中略)

こういう話がある。一〇歳の子供にとって一年は全人生の一〇分の一だが、二〇歳の青年にとっての一年は全人生の二〇分の一になる。よって一年は、その人の人生の エ である年齢によって感じ方が変わってくる。一〇分の一より二〇分の一のほうが倍の早さに感じられるというのは、当然だという理屈である。この論でいけば、七〇歳の一年は、一〇歳のときに比べて、七倍のスピードで過ぎていくということになる。

この話を耳にしたとき、私は思わず膝を打った。実感としてその通りだからだ。五〇歳の一年はあつというまに過ぎていく。けれど小学生のころの一年は非常に長かった、といまになって思うのだ。

つまり歳をとるほど、時間はどんどん過ぎていく。子供時代の一日は長くゆったりとしていたが、五〇歳をこえた私の一日はまたたくまに終わる。思いのほか時間が過ぎてゆくその焦りからか、私たちは歳をとるほど短気になるような気がする。

生物学者、柳澤嘉一郎はエッセイ集『ヒトという生きもの』（草思社）でこう書いている。

「七〇歳をすぎた友人から手紙がきた。『朝、おきて顔を洗います。朝食をすませて身支度をすると、もう昼飯です。しばらく休んで、さて仕事にかかろうとおもって、外を見ると、もう暗くなりかかっています。それで今度は、寝る支度を始めます……』少々、おおげさかもしれないけれど、おなじ齢のものとしては、よくわかる」

この友人の言葉に七〇歳をこえた柳澤も同意している。これは一年をふり返って「今年があつという間に過ぎた、短かったなあ」というカンガイのなかで、時の流れの早さを「感じとる」というような オ な話ではない。この言葉には切実感が漂っている。いまこのときに、流れている時間そのものが速い！ という感覚だ。早いではなく速いのだ。

柳澤はこの感覚を説明するのに生物学者らしい方法をとっている。私たちの体内に流れる時間は、時計の時刻として表示される時間とは一致しない。体内時間は代謝の速さに対応している。それはおおざっぱに酸素消費量である。酸素消費量が少なければ体内時計の進行は遅い。消費量が多ければ速い。この酸素消費量は脈拍数から推測できる。高齢者の脈拍数は毎分五〇程度、一方、子供は七〇くらいだという。この差は体内時計の差になる。

つまり、高齢者のほうが子供より体内時計の進み方が遅い。体内時計が遅いと、現実の時間が早く感じられる。逆に子供は体内時計が早く進むため、現実の時間を遅く感じる。歳をとることに時間が早くたつと感ずる理由は、そこにあるのだという。

（藤原智美『暴走老人！』による）

問一 傍線部 A・B・C と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A トウ|トツ

- ① 事態にトウ|ワクする
- ③ 大学をトウ|ゴウする
- ⑤ 駅にトウ|チャクする

- ② トウ|ロクを変更する
- ④ コウ|トウ無稽な話

2
1

B キ|ドウ

- ① キ|キンゾクを購入する
- ③ 先人のキ|セキをたどる
- ⑤ 俳句のキ|ゴを考える

- ② キ|チヨウ講演を聴く
- ④ キ|ゾンの法律に従う

2
2

C カン|ガイ

- ① 世の中をガイ|タンする
- ③ リ|ガイが対立する
- ⑤ ガイ|ゼン性が乏しい

- ② 小説のガイ|ヨウを書く
- ④ ダン|ガイ裁判を開く

2
3

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

オ	エ	ウ	イ	ア
④ 悠長 ① 退屈	④ 分母 ① 達成	④ 完成 ① 関連	④ 対等 ① 反対	④ 過酷 ① 寛容
⑤ 敦奇 ② 同等	⑤ 虚像 ② 理想	⑤ 媒介 ② 想起	⑤ 一様 ② 異様	⑤ 複雑 ② 微妙
③ 懸命	③ 必然	③ 侵食	③ 通常	③ 厳格
28	27	26	25	24

問三 傍線部(一)「かつてはレストランに予約を入れるということは、いまほど一般的ではなかった」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

29

- ① 時間割を構築して、なるべく不確定な時間を入れないようにしようという意識がことのほか強かったから。
- ② 他者と自分との時間をすりあわせ、両者の時間が重なる地点をゆるやかに探すような態度が日常的だったから。
- ③ アポなし訪問はあたりまえであり、そもそも日本の学生はアパートに電話も引いていなかったから。
- ④ ドアにはさまれたメモによって来訪者があったことを知るような時代には、友人を訪ねても留守で待たされることが多かったから。
- ⑤ 店先で順番を待ったり、物事を計画立てて時間通りに進行させたりする意識がいまのように希薄だったから。

問四 筆者が、傍線部(二)「時間」について思いをめぐらすとき、ポリフォニーという言葉を使い起こすのはなぜか？ 最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

30

- ① 現代の私たちは、それぞれが独自の声をポリフォニーな時間の中で確立しようとして奮闘しているから。
- ② 私たち一人ひとりが抱えているポリフォニーな時間は、誰かが投げこんだ石ころによって乱され変化する川の流れに似ているから。
- ③ 個々人のポリフォニーに流れる時間は並列的に流れているだけでなく、私の時間と他の誰かの時間とが別々に存在しているから。
- ④ 時間をめぐるさまざまなポリフォニー的葛藤を考えると、水流が複雑に絡み合い互いに影響し合いながら流れている川の流れを連想するから。
- ⑤ 社会とは個人がかかえる時間の集合体であり、多くの声としての時間がポリフォニーに進行する世界として成りたっているから。

問五 傍線部(二)「帯グラフ的時間」とはどのような時間か？ 当てはまるものを、次の①～⑧の中から三つ選べ。

31 · 32 · 33

- ① 見知らぬ誰かによって巻きこまれた時間
- ② 時間割として構築された時間
- ③ ホモフォニーな時間
- ④ 予期せぬ「待たされる」時間
- ⑤ 多元的でポリフォニーな時間
- ⑥ 不確定な時間
- ⑦ 体内時計によって計られた時間
- ⑧ 計画通りに進行させられる時間

問六 傍線部(四)「暴君ネロでも、ロビンソン・クルーソーでもない」とあるが、「暴君ネロ」や「ロビンソン・クルーソー」

に例えられた人物とはどのような人物か？ 適当なものを、次の①～⑦の中から二つ選べ。

34 · 35

- ① 焦りのため短気になった老人
- ② 帯グラフ的時間に拘束されない自分
- ③ ポリフォニーな時間を受け入れる自己
- ④ 独自のホモフォニーな時間を確立している人間
- ⑤ 突然訪ねてくる来訪者
- ⑥ まったき孤立した存在
- ⑦ 自分の帯グラフに従ってくれる他者

問七 傍線部(五)「生物学者らしい」説明とはどのようなものか？ 最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

36

- ① 私たちの時間は、時計の時刻として表示される時間と一致しており、それは酸素消費量つまり脈拍数に対応している、という説明。
- ② 私たちの体内に流れる時間は、酸素消費量と関係しており、この酸素消費量は脈拍数から推測できるため時間が早くなる、という説明。
- ③ 人生は年齢によって感じ方が変わるのだから、一分の一より二〇分の一のほうが倍の早さに感じられるというのは当然だ、という説明。
- ④ 五〇歳をこえると一日はまたたくまに終わり、時間が早く過ぎてゆくその焦りから、私たちは歳をとるほど短気になる、という説明。
- ⑤ 体内時計は酸素消費量すなわち脈拍数に対応しており、脈拍数が少なく体内時計が遅いと、現実の時間が早く感じられる、という説明。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

37

- ① 高齢者の脈拍数は毎分五〇程度であり、子供は七〇くらいであるが、これは体内時計の差となって現れるので、酸素消費量を脈拍数から推測するべきである。
- ② 私たちの体内に流れる時間は、時計の時刻として表示される時間とは一致せず、脈拍数から推測される酸素消費量の差が体内時計の差になる。
- ③ 高齢者になるほど時間は早く過ぎてゆくことになり、その焦りから歳をとるに従って短気になってしまい、そのせいで時間が早くたと感じてしまう。
- ④ 高齢者の脈拍数は毎分五〇程度であるが、子供の脈拍数は七〇くらいであり、子供の体内時計は早く進むため、子供は現実の時間を早く感じてしまう。
- ⑤ 脈拍数から推測できる酸素消費量が少なければ体内時計の進行は遅く、消費量が多ければ速いので、時計の時刻として表示される時間で計るべきである。